



第20号
平成七年
(1995)
7月15日発行
(年4回発行)

寒山寺の鐘

東明雅

私は日本では晴男^{はれおとこ}として通っているが、中国では通用しないらしい。尤も、この旅行の時期が五月の末から六月の始めにかけて、中国も麦秋のころであり、同時に梅雨の季節でもあるので、この旅中雨に悩まされたのもむしる当然のことだったかも知れない。五月三十日正午すぎ、蘇州站(駅)で火車(ジゼル車)を下り、早速バスで寒山寺に向った時は、今にも泣き出しそうな空模様であった。寒山寺の名物の鐘は、黄色く塗ったわりに小さい鐘楼の二階に収まっていた。古いけれども何の変哲もない、中国風の鐘である。お金を出せば撞かせてくれるそうで、そう言えば、境内に入ってから鐘声が絶えまなく響いていた。ガイドさんが、この鐘を三度なら

すと、一に十歳若くなり、二に幸せになり、三に金持ちになると言う。まるで日本の無間の鐘の伝説と同じで、もちろん、こちらの方が元祖なのだろう。私も撞いてみたが、日本の梵鐘のいわば沈鬱・荘重な音に対して、軽くて高い響き、鐘楼を出ると雨が落ちていた。しかし、この鐘の音が、凡そ千年前、科挙の試験に落第して、郷里に帰る失意の青年張継の耳には、余韻囁々、憐れにも悲しくも聞こえたのであろう。

張継

月落烏啼霜滿天

江楓漁火對愁眠

姑蘇城外寒山寺

夜半鐘聲到客船

あまりにも有名なこの詩、中国では小学校の生徒に必ず教えて、一種の勸学の詩としているそうであるが、地下の張継先生は生前、夢想だもしなかったことであろう。

張継という詩人は、この楓橋夜泊の詩の外には殆ど作品は残していない。たったこの一首のために、彼の名はまさに千載の後まで残り、外国(日本)にまで轟いたのであるから、当人はもって瞑すべきであり、寒山寺の鐘もとんだ功德を施したものである。

とすれば、同じ鐘を聞くにも、天気が快晴でなくて、じとじとと陰鬱な日和であったのは、この詩の気分を味わうにはやや通うところがあったかも知れない。とところで、この寺の名の寒山寺とは何か、

寒山とは「広辞苑」によれば、

唐の僧。国清三隱の一。天台山の近くに捨得(じつとく)と共に住み、奇行が多く、豊干(ぶかん)に師事したと伝える。その詩は「寒山詩」に収載。文殊の化身と称され、画題にされる。生没年未詳

①寒山と捨得と。②(画題)寒山・捨得の飘逸な姿を組み合わせた中国・日本画の題材の一。鎌倉末期以後、漢画系諸流や狩野画家たちに好まれた。寒山は経巻を披き、捨得は箒を持つ図様が多い。③坪内逍遙作の舞踊劇。寒山・捨得の洒脱な生活を叙したもの。明治四四年初演。

右の説明で不十分な方には、森鷗外の短編小説「寒山捨得」を一読されるようにすすめる。これが流石に一番分かりやすい。

私は旅から帰って、改めて寒山の詩を読み返してみた。その詩は山林幽隱のよろこびを詠じたものの外に、民衆を相手に具体的・現実的な教訓を詠んだもの、また、当然のことながら仏教、ことに禅の悟りについて述べたものなど区々で、到底例の蓬髮弊衣の乞食僧寒山一人の作とは思えない。要するに寒山は伝説上の人物に過ぎないのである。そのような寒山寺が有名になったのはひとえに「楓橋夜泊」の詩によるもので、張継も寒山寺に大きな功德を施していると言うべきである。

平成七年立機式のことなど

豊田 好敏

昨年の十二月から準備に入った平成七年の『立機式』は、今年五月十七日にめでたく、なにごとも支障なく終わりました。東明雅先生を始め関係者のみなさんはホッとなされほんとうにようございました。

この立機式のお手伝いをしながら、つくづく考えたことは、私は連句の世界の他のグループのことはほとんど知りませんが、一つの結社で百五十人以上の会員が、連句の実作を楽しみながら、毎年二回の正式俳諧と時にはこのような大きなイベントを挙行する楽しみが持てる『猫養会』の結束と実績は、誠に立派で驚くべきものだと思います。

それでは、今回の立機式で行われた新しい試みをいくつかご紹介いたしますが、お祝いの会として、華やかで楽しかったことをいきたいと思います。

猫養会 会員だけで百韻付け廻し

『猫養会』連衆だけで巻いた立機式祝いの付け廻し百韻の出来のよいことは、見事なものと皆様もお喜びでございましょう。

ご担当された上月淳子さんのお上手なたづな捌きはもちろんですが、まだまだ数十人も付けていただけなかった方が溢れていてお誘いできなかった会員がたくさんいらっしゃると思います。この次の立機式には百韻二巻になるでしょうか。

新宗匠 お礼言上の“連ね”披露

一穂庵啓世宗匠から順次に台詞を述べられて、締めくくりが梓庵哲宗匠でした。

まず、啓世宗匠の台詞のさわりから「齢八十路の坂を越え、恩師よりいただきました文台は、持てば軽うはございますが、連句の精進はずしりと重うございます。」

涼月庵あかり宗匠は「都の北に住みなして、ACCから芭蕉庵、少しも休まず通いぬて連句の道の一筋に、ときには娘隣人など誘い、面白さなど教え次ぐ」とつづきます。

房連庵麻子宗匠は「もとは短歌の出なれども、巡り合いたる俳諧に魅いられたるが始まりで、集う連衆楽しみに、日々精進の麻子でございませう。」とおとなしく述べられました。

緑華亭孝子宗匠は「さて武蔵野に月星の光も澄める天文台。その懐の草深く、二人の母や犬、亭主、子供の世話もおおざりに、迷い込みたる連句道。鬼の孝子の名を馳せ

てばんこつエンジンふかしゆく」と俳諧調でごあいさつされました。

梅香庵久美子宗匠は「ACCの一筋に咲き続けたる梅の花、これからは、驚たちも呼びながら、連句に精進いたします」とのべられてバトンタッチ。

久慈庵弘子宗匠は「茨城に久慈川という川ありて、ゆうゆう俳句の船を漕ぐ。櫓には俳句と文学館、舳先に連句の旗たてて」で最後に、真打ち的に登場の梓庵哲宗匠が「三田の台地に根を張って、きりりと絞る梓弓、猫養の栄万世にと、的にはっしと当てます」と義太夫調に纏めてくださいました。

もちろん各宗匠の台詞のなかに、庵号とお名前、そして「どうぞよろしく」というという言葉がありますが、紙面の都合で割愛させていただきます。

長唄『松のみどり』でのお祝い

唄は岩垂景翠さん、三味線はタテが大窪瑞枝さんで上調子が瑞枝さんのお嬢さんの松田千春さんでした。景翠さんも瑞枝さんともに猫養会のメンバーで、人材豊富なことは驚くばかり。最後の宗匠ご退席の三味線もよいお開きとなりました。

宗匠誕生

佐藤 良彌

東明雅氏が指導する連句集団「猫蓑」は、平成七年五月十七日正午から江東芭蕉記念館に、全国から会員約百名を集めて伝統に則った立機式を行った。

猫蓑会は芭蕉以降三百余年、直門の北枝からの流れを連綿と受け継いでいる蕉風伊勢派の連句集団。この日の立機式では七人の練達の連句人が宗匠として独立することを明雅宗匠により許され、「文台」と呼ばれる桐づくりの捌き台と庵号がそれぞれ与えられた。新宗匠となったのは、梓庵中川哲、一穂庵中島啓世、涼月庵中田あかり、房連庵内田麻子、緑華亭坂本孝子、梅香庵副島久美子、久慈庵市野沢弘子の七氏。明雅宗匠は、「多年研鑽の甲斐あってそれぞれ名譽ある免状と地位を獲得された気持ちはいかがでしょうか。皆さんがこの度新たに宗匠になられることは、誠に心強く最高の喜びであります」とお祝いの辞を述べられた。新宗匠七人を代表し、梓庵哲新宗匠は、「この上は一層の精進に励み、不易流行の心を忘れず、変わらぬものを大切にしながら新しい変化に対応して行きたい」とお礼と決意のほどを披露。盛大に古式豊かな立機式は終日なごやかに運んだ。

立機式裏方として

蒲原 志げ子

新宗匠七名様へこの度の立機、心よりお喜び申し上げます。

前回は立機式とは何ぞや、と俄か勉強の末「うらら会」を総動員の夢中のお手伝い。

今回は猫蓑のベテランの、お助けを得て何とかポロを出さずにお務めを果たささせて頂きました。お知恵をお貸し下さいました皆様に厚く御礼申し上げます。

裏方が目立つようでは失敗と心得まして、襲名興行の、花形大夫の付人、番頭、黒衣にならぬ、お客様第一、大夫第一、を心掛けたつもりで御座います。

手練れの送り囃の三味線で、各宗匠がはれやかなお顔で退場なさいましたのが何よりの喜びで御座いました。

七宗匠から手厚い御礼の言葉を頂戴し、只々恐縮しております。

総監督の和子宗匠のご指示が的確で下働きは大助かり、脚本、演出、役者が良ければ興行は成功の見本かと存じます。

猫蓑にはまだまだ宗匠候補が目白押し、回を重ねる毎に会も発展するものと信じております。風雅の道の奥は深うございますね。

親しき立機式

加藤 道子

新宗匠様方、このたびの立機おめでとうございます。

今年竹、七賢人、輝く星、誠にその通りで、田舎者の私には猫蓑会の多士済々は驚きでした。そのすごい方々の中より選り抜かれての名譽ある本日の立機式。

幸せなことにこの度も蒲原さんの下に、立機式のお手伝いをさせて頂きました。お客様として晴れがましい式を憧れの眼ばかりで見たいと思いません。

「座布団の位置はいいかしら」「おみ足の都合の悪い〇〇様はすっくとお立ちになれるかしら」「お土産の袋に入れ忘れた品はないかしら」とハラハラドキドキ。

和子宗匠の柝も笑いを誘いつつ、式は和やかにかつ厳粛に進行、拍手のうちに鳴り物入りで新宗匠様方ご退場。

あれやこれやで失礼ながら恐さも忘れ、身内の式を心配する田舎のおばさんの様な親しみを覚えたという次第です。



幕のない舞台

市野沢 弘子

演劇や音楽等の芸術的表現には、俳句の世界とは異って、必ず暗れの舞台があるものである。大勢の人々を前にして、舞台へ上る緊張感。しかし俳句で己を表現する者にとっては、そういった緊張感は無縁なものだと、私にはかねがね思っていたのであった。ところが俳諧の世界にも暗れの舞台があったのである。

「正式俳諧」にはこれまで、副知司、香元、花司、といった役で連座させていただいたが、執筆という役はまた特別な役であると思う。それまでの経過がどうあるかと、表現されたものが全てであることは、他の芸術ジャンルと同じである。身体で表現するということは、全人格がぼろぼろ出てしまうことも分り、一時は悩んだりしたが、兎に角、誠心誠意、それに健康と平常心で行くことに決めた。間違っても消しゴムで消したり出来ないという現実を肝に銘じて。さて当日の四月二十日は降りそうでいながら午前中はどうか降られずに済み、式田和子様に手伝っていただき役の支度が出来上がった。神前で御祓いを受け、主婦の顔から執筆の顔に少し変わったかなと思ふ頃、「木語俳句会」の仲間から励ましの声を受け、「がんばらなくちゃ」と自分自身

知司役を終えて

峯田 政志

を鼓舞する。席入り、配硯、と進み、花が活けられ、いよいよ執筆の出番である。雅楽に促される様に立ち上る。緊張半分、平常心半分、自分自身をコントロールしながら、執筆役になり切って行く。次の動作への間の取り方に気を遣いながら、文台捌も無事に終り、下俳諧の最後の句を読み上げる。最初の方が「付け」と進み出て、句を差し出して席にもどる。当然次の方がすぐに「付け」と声を上げるものと思っていた。しかし次の方はすぐには「付け」と言わなかったのである。その間一分か二分位だったとは思うけれども私は「どうしたんだろう、困ったな」と一瞬落ち込んだが、自分で「あっそうだ、前の方が句を付けて席にもどったら、もう一度その句を読み上げなければいけなかったんだ」と我に帰ったが、それと同じ位に「付け」という声が入り、ほっとしたのであった。

文台捌という一幕目が無事終り、いよいよ興行という二幕目に入る時にほんの少し気の緩みが出たのであろう。もっとも後でその事を何人かの方に聞いてみると、誰も気がつかなかったとの事で、救われた思いに疲れも何処かへ飛んで行ってくれた。刻苦研鑽というには少し大袈裟過ぎると思うけれども、一つの役に、一つの型に成り切るための努力は決して無駄なことではなく、その努力の向うに、またさらなる俳諧の奥深さが待っている事を教えていただいた貴重な体験であった。

知司のお話を戴いたとき、正直いって驚いた。私には過ぎた役で固辞したい、と思った。大先輩に諭され及ばずながら頑張ってみようと決心するまで結構時間がかかった。さてそれからが大変。正座の練習に、慣れぬ和服の着用と続き、そうこうする中に当日がやって来た。実際に正式の興行に直面した時は、それまでの緊張感とはうらはらに随分と楽な仕事であった。着付も手際よく先輩がこなしてくださり、式の進行も極めてスムーズであった。各パートを担当なさる方々が総てを心得ていて「ひさご」の付ではないが、何ともせぬに落ちる釣棚ではなかった、成りし正式、という感想であった。その為か二度目の藤祭りでは知司の自分である肝煎りを忘れ、おんぶにだっこで先輩に注意された。しかし、何とか通り過ぎてみるとやはり解放感があり、見物側がええなあという怠け癖が出る。

正式には何と言っても儀式の非日常性と「文台と我との間に髪を入れず」の緊迫感の再現という手応えがある。初見の頃はけったいな、ややこしい事と思ったことが少しずつ私なりに変容して、「ひさご」の序の、乾坤の外なる越人の気分思い到るようになった。

亀戸天神藤祭り奉納正式俳諧

次第 役割

一	席改め	宗匠	副島久美子
二	席入り	脇宗匠	豊田好敏
三	配硯	副宗匠	内田麻子
四	献花	執筆	市野沢弘子
五	執筆呼び出し	知司	峯田政志
六	文台捌き	副知司	篠原達子
七	俳諧興行	座配	倉本路子
八	花前	座見	須田智恵
九	玉串奉納	花司	橋文子
十	花の句披露	配硯	岩井啓子
十一	端作り	同	久保田庸子
十二	吟声	同	桑原美津
十三	文台返し	老長	中川哲
十四	知司挨拶		

平成七年四月二五日
於 亀戸天神社

正式俳諧

二十韻 藤祭

緩やかに流るる笛や藤祭
池面近くに黄蝶紋蝶
春シヨール幾何学模様編み上げて
チラシ広告しげしげと見る
浅間嶺の噴煙かすか月照らし
野葡萄かもす漢髭づら
抱きよせる姫ふるへをりすずろ寒
欲求不満狙ふ洗脳
宗教は麻薬なりしとマルクスが
渡るはね橋からむ枯蔓
餅搗きの音頭取るのは家の婆
甚句覚えて序二段でやめ
四駆動ローンで買ってポランティア
美人に会へばすぐにナンパし
夏瘦とうそをつくまで恋に痩せ
金魚すくひの網透かす月
定年を少し余して退職す
民話聞く旅寺めぐる旅
飛花しきり黒犬ぴんと耳を立て
絵凧を作る縁側の子等

明雅 哲 清子 好敏 麻子 志げ子 政志 文字 路子 啓子 庸子 淳子 智恵 豊美 美津 良弥 蓉子 久美子 執筆

平成七年四月二五日 首尾
於 亀戸天神社

二十韻 五尺の藤 東明雅 捌

霄れあがり五尺の藤の雫かな
亀が鳴くかと池の反橋
あたたかし先生児らの輪の中に
ポケットのなかチヨコにキャンディシズ
シャガールの空のをどりこ夏の月
国際列車不意の駆落
窓硝子軽く叩いて別れ告げ
検問を避け袋小路へ
垢嘗めといふ妖怪が銭湯に
雪ややかかる富士が一番
熱燗の手酌自棄酒泣上戸
人のこころがわかる老猫
円卓の騎士はいづこそ古館
ウィーンオペラのひびく詠唱
眉の月少年恋を知り初めて
まるめろを囁む珠の皓齒よ
興福寺色なき風が肅々と
年々歳々夢遠くなり
散り急ぐ花はことさら惜しまるる
声競ひ合ふ鶯と鶯

明雅 紀子 啓子 富美 泉子 保男 泉 雅 啓 美 ズ 紀 美 紀 泉 啓 男

平成七年四月二五日 首尾
於 亀戸天神社
連衆 椿紀子 岩井啓子 小野シズ
村田富美 青木泉子 吉池保男

二十韻 藤の社 浅賀淑代 捌

二十韻 藤の雨 五味蓉子 捌

二十韻 藤房 権頭和弥 捌

めでたきは藤の社の笙の笛

淑代

水かげろふの映ゆる丹の橋

淳子

エアメール雉子翔つ切手貼りありて

政治

テレビ体操深呼吸する

正雄

月の友美少年てふ銘酒提げ

弘子

二の腕あらは配る秋蕎麦

かりん

蠅螂におびえ課長にすがりつき

淳

新党構想ついに潰えぬ

志

学校は行かずに修業励むらし

弘

富士を写しに四駆走らす

淳

蘭涯の落款しるき古曆

ん

祖父の代より継ぎし頭取

弘

麻雀卓を囲む賑ひ月涼し

淳

マイ・シンの香に匂ひ立つ肌

雄

夢の中いつしか彼に抱かるる

弘

あら仏守り後悔はなし

淳

流水の根に休みたる雑魚の群れ

志

四つ目垣から猫の睨みて

ん

杖とどむ肩に落花のしきりなる

雄

菓子ほろほろとこぼす春愁

志

御社もうすむらさきや藤の雨

蓉子

句座和やかに春興の刻

あかり

蛭汁味噌あじ薄く仕上りて

清子

体操メニューワープロで打つ

健悟

首細きモジリアニの絵夏の月

路子

暑氣中りしてすっぱかすとは

八千代

うぬぼれの急転直下自己嫌悪

悟

鏡に紅で妊娠の文字

り

縄電車いつの間に見がひとり増え

清

毒ガス騒ぎ猫も逃げ出す

り

円空仏街中叩く寒詣

清

おほか削りて湯豆腐の鍋

路

おもたせの地酒の酔ひのよくまはり

代

盧生の夢やフロイトの夢

蓉

玻璃越しの月はシユールにまたたきて

悟

すずろに寒し添臥の肌

清

どうにでもお好きなままに鴟の糞

代

携帯電話ふつと鳴りやむ

悟

歳々の西湖の花を仰ぎつつ

清

イーゼル立ててうららかな丘

路

藤房の揺れを返すや鯉の列

和弥

忘れ霜置く飛石の上

啓世

ホテルマン鞆数へて麗らかに

孝子

ガイドブックを声出して読む

智恵

山稜の切株照らす月涼し

好敏

夏入りの僧に一目惚れする

美津

連子窓恋に細りし身を凭す

子

厄年過ぎて祖母になるとは

敏

漫画から出て来たやうなガスと銃

子

カナリヤだってとんだ迷惑

敏

熱燗の鉄瓶回す漁師たち

子

じぶの鍋にはわさび少々

世

指切りで別れた女の今何処

恵

白露の夜を紡ぐ機織

津

月光に踊る鎧のがちゃがちゃと

子

枳殻の実は何の菓ぞ

敏

オカリナの曲をバックに太極拳

津

外国地名舌を噛みつつ

世

余呉の湖舟かけ絶へて花ふぶく

恵

春兔飼ふ兄と弟

津

* 富士山を得意とした画家

** 香水の名

平成七年四月二五日 首尾

於 亀戸天神社

連衆 上月淳子 氏原正雄 峯田政志

市野沢弘子 登坂かりん

平成七年四月二五日 首尾

於 亀戸天神社

連衆 中田あかり 下鉢清子 佛淵健悟

倉本路子 斉藤八千代

平成七年四月二五日 首尾

於 亀戸天神社

連衆 中島啓世 坂本孝子 須田智恵

豊田好敏 桑原美津

二十韻 藤の房 高橋 豊美 捌
二十韻 白藤 八代 扇 捌
二十韻 菅公像 吉村 むみこ 捌

ゆるらかに風の過ぎたる藤の房

豊美

白藤の清ら尽して雨の糸

扇

藤咲くや御歳五歳菅公像

むみこ

名は知らねども高き囀り

治子

琴弾鳥の飛ぶか朱の橋

哲

池のほとりで遊ぶ子雀

郁子

飯蛸を添へし弁当配られて

和子

粒雲丹をチーズにくるみカナッペに美奈子

久美子

浅鯛飯味よく炊きてお隣に

一恵

馴れぬ袴で坐る真四角

水壺

短く終るファックスの文

達子

テレビつければニュース始まる

志げ子

振り返るひとの瞳に月涼し

代々子

歳の市見る人も無き月ありて

庸子

月明り初雪と書く日記帳

守男

避暑地ゆきずり手を出しちや駄目

澄子

留守をまもりて雪下しする

久

鏡にむかふ皮の冬帽

てる子

お茶ですかコーヒーですかキスですか

和

右頬の笑窪やさしき髭男

哲

はにかめる包の乙女を夢かとも

郁

町工場の機械鳴り止む

代

茶髪Gパン胡座哄笑

奈

草原駆ける相聞の歌

て

横書きで付句案ずる若宗匠

澄

犬もまた納得づくの喧嘩沙汰

奈

応援はお断りです無党派で

志

地球サイズの愛猫の会

蕉肝

百名山を夢に登りぬ

庸

酒屋の小僧運ぶ酒樽

恵

山眠る誰も知らない小さき塚

澄

名古屋場所不知火型の土俵入

達

柱立て腹に晒が胡座かき

男

里の神楽のおかめひよっとこ

代

鏡割して景気復興

哲

縁台将棋王は隅っこ

志

テレクラでだますつもりがたまされて

肝

限りなく公定歩合0に寄る

奈

厳格な親なのと言ひしなだれて

恵

レバ、ハツ、タンに濁り酒酌み

壺

行李だけでと殿下お言葉

庸

先に待ってる白萩の宿

て

糸満の地引き大漁月の下

和

月影に透き通る肌かき抱き

久

遊行忌の月も斜めの古物市

志

神経痛が笑ふ重陽

壺

カンツォーネ聴くミラノやや寒

同

膝の痛みをかこつやや寒

郁

染色の六代続く家を継ぎ

美

かまきりが螺旋の階に斧をあげ

庸

旦那芸今はスナックカラオケで

恵

ファッション界も狙ふ意気込み

治

巡回牧師子らと遊びぬ

達

ボーリングまた格別な技

て

花の蔭硯にたるる谷の水

肝

花万朶元禄見得の力瘤

哲

入生田の里に枝垂れて花大樹

郁

子等と一緒にしゃぼん玉吹く

治

野面を渡る凧ののびやか

奈

ぶらんこに寄り缶の珈琲

男

平成七年四月二五日 首尾

於 亀戸天神社

連衆 加藤治子 式田和子 今宮水壺

橋野代々子 八角澄子 近藤蕉肝

平成七年四月二五日 首尾

於 亀戸天神社

連衆 中川哲 副島久美子 篠原達子

鈴木美奈子 久保田庸子

*棟上げのこと

平成七年四月二五日 首尾

於 亀戸天神社

連衆 東郁子 山崎一恵 蒲原志げ子

近藤守男 萩原てる子

立机式作品

二十韻 今年竹 東 明雅 捌

燦々と露の葉末や今年竹

立机の縁にそよぐ風の香

ムツクリを吹く少年の細りゐて

小舟あやつりめぐる湖

丑満に静まり返る里の月

温め酒に惚れ葉ませ

そぞろ寒待ってる言葉決まってる

青島都知事どこへ行くのか

鳥の音も聞かぬ穴場に出湯の旅

雪柔らかく倒す神木

縄跳びの子の列につく生鱈魅

うさんくさいぞかのデラシネは

ネフスキー通り晩夏を新発意と

鱧の湯引きに白き月影

放蕩のあげく耻骨の溶け出して

五十路すぎても未だ独身

どき廻り山猫の棲む西表島

画架をならべてうららかな昼

刎頸の友と気儘の花の宿

ごまだら蝶が羽をひろげる

平成七年五月十七日 首尾

於 江東区芭蕉記念館

連衆 内田素舟 瀧田遊耳 高瀬美保

阿部一笠 松本碧 浅賀淑代

二十韻 夏空や 穴澤 篤子 捌

夏空や鷺着水の羽ひろげ

葉柳ゆれつ通りゆく舟

幼子と折紙あそびきりもなし

キャロットジュースお三時に出る 房連庵麻子

昼の月トランペットをひとり吹く 瑞枝

踊自慢の集ふ境内

肌寒につい寄り添ひて抱かれて

痴漢の坊やおどすたのしみ

夕暮の橋いっせいに燈りたる

何をかくすか富士の風穴

大根干す家も敷地も婆のもの

ポルシェ乗りつけ凍月の湯屋

着物着るよろこびが先稽古事

せつなき吐息かかる耳元

許されぬ愛と真砂女の恋談義

同じ香水ここにあそこに

格安でめぐる海外アナトリア

茸毛若駒駆けぬける丘

すくと立つ千年の花ひさご酒

友とお揃ひ春のスカーフ

平成七年五月十七日 首尾

於 江東芭蕉記念館

連衆 今井英子 中川凡

房連庵麻子 大窪瑞枝

二十韻 あなにやし 梅田 利子 捌

立机を寿きて

あなにやしえおきなおみなや夏衣

葉柳揺るる文台の影

エアバッグ付きし車に買ひ替へて

缶コーヒーでちよつと安らぐ

月光を浴びて豎琴弾く少女

托鉢僧の恋のやや寒

彫像の神にも捧ぐ濁り酒

猫になつたり虎になつたり

日米の貿易交渉急を告げ

海賊版のビデオ山積み

顔見世はヤマトタケルに装ひて

寒月仰ぐ書き割りの庭

学長が高額所得に名を連ね

核融合のごとき抱擁

せつかくの育児休暇に嬰が出来

チーズケーキもあんまんも好き

土俵上希望絶望星取表

青虫いつか蝶に成り行く

父母を偲ぶ故郷花の下

蹠にひたと寄せる春潮

平成七年五月十七日 首尾

於 江東芭蕉記念館

連衆 蒲原志げ子 豊田好敏 中村麻理

遠藤央子 久慈庵弘子 野崎照子

二十韻 玉解く芭蕉 倉本路子 捌
 二十韻 マロニエ 雑賀遊 捌
 二十韻 薄暑かな 杉山壽子 捌

精進の風に玉解く芭蕉かな

路子

沖さしてゆく軽鬼の子の水脈

清子

パイの皮層をなしたる嬉しさに

達子

暗譜で弾ける曲は一曲

健悟

月明の円形劇場ねころんで

良彌

思はず触るる新涼の肌

智恵

カサノバのごとき恋するきりぎりす

悟

赤信号の灯る街角

彌

何もかも電脳機器に託すらん

悟

ぐーちよきばーのぐーだけの嬰

清

システイナ礼拝堂にぬかつきぬ

同

肉は木曜魚金囉

達

初売の旗ひるがへる暁の月

恵

「しばれるねえ」と囲むかんてき

達

紅つきしワイングラスを差し出され

彌

ずっしり重い姐さんの過去

悟

大志いつか夢は小振りにしほみつつ

彌

のどかに翔べる模型飛行機

達

魑魅魍魎お通りなされ花の下

清

亀鳴く里を尋ねゆく旅

恵

平成七年五月十七日 首尾
 於 江東芭蕉記念館
 連衆 下鉢清子 篠原達子 佐藤良彌
 須田智恵 佛淵健悟

紅白のマロニエ道や異国めき

遊

筍流し誘ひ来し雨

一穂庵啓世

ふっくらとだし巻卵焼き上げて

紀子

玄人跣友の腕前

良子

月上る大川端の冠木門

徒司

願ひの糸に夢をかけつつ

安子

カップルでユーロトンネルミカエル祭

世

螺旋階段走る怪盗

紀

迷文句電子辞典に引惑ひ

良

すり切れるまで愛用の服

安

柚子風呂に徳利浮かせて暢気パパ

同

仔連れの狐月に嘯く

紀

九十九袋無住の寺の欠佛

良

峠下れば古き色街

司

悪戯にちよっとジャブなど出してみる

紀

シルバー仲間好きなウクレレ

世

車庫入れが出来ずとれない免許証

司

復興兆す島に初蝶

良

爛漫の花リモージュの壺にあり

世

窓開けて呼ぶふらここの子等

安

平成七年五月十七日 首尾
 於 江東芭蕉記念館
 連衆 一穂庵啓世 椿紀子 本屋良子
 杉内徒司 神谷安子

薄暑かな竹の葉濃ゆき芭蕉庵

壽子

新茶まるやか寿ぎの膳

嫺

姿良き犬の主の揃ふらん

和子

小脇に挟むつば広の帽

てる子

新刊のグラビア写す月の窓

理恵

差し向ひたる林檎酒の卓

英子

赤い羽根並ぶ彼女にときめきて

和

いつの間にならぬオウム入信

恵

洪滞をすり抜けて行くオートバイ

嫺

大綿虫がひらひらと舞ふ

る

咳込みて美声の喉も塞がるる

英

女座長の撥の確かさ

る

たくましき背ナの刺青盗み見つ

恵

双体神にちよっとやきもち

嫺

月涼し安達良山の凹みより

壽

怪魚浮遊し入江騒然

英

あの頃は若き力をぶつけ合ひ

る

父と息子と風の糸繰る

英

花の降る道を往き来の夢の中

恵

置き忘れある春のパラソル

嫺

平成七年五月十七日 首尾
 於 江東芭蕉記念館
 連衆 八代嫺 式田和子 萩原てる子
 内田理恵 佐古英子

二十韻 夏館

八角 澄子 捌

二十韻 梓弓

東 郁子 捌

二十韻 庵若葉

百武 冬乃 捌

吟声のひとときは高し夏館

澄子

梓弓金を射とめし夏袴

郁子

蛙石汝も一座せよ庵若葉

冬乃

新宗匠を祝ふ新緑

水壺

祝立机
ふふむ新茶に古渡りの盞

梓庵哲

新宗匠の肩に薫風

守英

川波は満潮となりうねりて 涼月庵あかり

啓子

水平線舟影遠く浮かぶらん

シズ

貨物船水夫口笛ひびかせて

蓉子

友の個展でゆくりなくあふ

淳子

堤防添ひに網を干す人

ゑみこ

お好みパック佃煮を買ふ

芙紗

マンハッタン地下鉄出れば十三夜

啓子

教会の祈りの歌に月昇る

代々子

望月に故郷の銘酒ゆるると

秀樹

窓にうつれるうそ寒の顔

淳

ジンジャー薫り届く恋文

かりん

夜学生待つ定年の父

英

秋扇ちよっときどって招きよす

り

やや寒の麻布十番肩抱いて

ズ

二科展をめざしてモデル奪ひ合ふ

樹

ピロートークの口をふさぎて

淳

似顔絵画きの座る道端

こ

ついてくひとよいつもわたしは

紗

ずるずると謎がでてくるカルト団

啓

欠伸する猫にいらつき吠える犬

ん

雨降って阿蘭陀坂の晴にけり

英

あなぐま戦法ついに負けたり

淳

救急病院けふも溢れる

ズ

洋風骨董並ぶ街角

樹

晩酌のあとの寝酒を楽しみに

壺

初刷のスクープ記事で社長賞

哲

猫を抱く単身赴任厚襦袍

子

美人なれども怖い婆つつあま

り

月に乾杯鮫鱈の鍋

こ

なまはげ来たたと覗く月の戸

同

覗見ははらりネグリジェ落とす時

淳

一\$が三百六十円だったとき

代

高速路川の広さをひとまたぎ

英

拾得物の届く交番

壺

チャールストンでまた浮かれ出し

ん

コンビニできてふえる肥満児

紗

夕月に輕嶋の子の浮き潜き

壺

長髪の裸女を選びて尊師さん

哲

拗ねやうにまたそそらるるラヴホテル

英

後継者無くひとり盆塗る

貞子

うっすらかかる富士の笠雲

ズ

香車男と桂馬女と

樹

オンライン自動振込電信で

啓

モノクロの写真に惚ぶ旧き友

代

無住寺の夢幻観音さび給ふ

紗

こんもりつんもり青鯿のつや

貞

谷戸の奥なる鶯を聞く

こ

かげらふコートサーヴ打ち込む

子

高遠の絵島ゆかりの花吹雪

り

花万葉千秋楽の旅芝居

哲

山の旅友と浴びゆく花吹雪

紗

蝶々と共にくぐる山門

啓

夢の如くに上がる風船

ん

小藪がくれにかかる鳥の巢

子

平成七年五月十七日 首尾

於 江東芭蕉記念館

連衆 今宮水壺 涼月庵あかり 上月淳子

岩井啓子 山野貞子

平成七年五月十七日 首尾

於 江東芭蕉記念館

連衆 梓庵哲 小野シズ 吉村ゑみこ

橋野代々子 登坂かりん

平成七年五月十七日 首尾

於 江東芭蕉記念館

連衆 野崎守英 五味蓉子 根津芙紗

青木秀樹

二十韻 夏燕 若尾 よしえ 捌

大川の水滔々と夏燕 よしえ

初鯉のせ売りに来る声 豊美

古書開く香りほのかに匂ひきて 利子

懐中時計ちらと目をやる 緑華亭孝子

月の出に影絵となれるビルの群れ 景翠

樽にのぼるやや寒の紅 志紅

濁り酒酔はされたふりすがりつく 美

石の羅漢のひとり泣くめり 翠

ものものし機動隊布く富士裾野 同

犬撫でてやる小さき幸 孝

一日中モーツァルト聞き毛糸編む 美

雪後の月に走る物の怪 孝

このあたり埋蔵金の在りどころ 利

主に洗はず足の裏など 孝

ブロードの看護婦今は女房で 美

エホバ尋ねる傷心の旅 翠

竹馬を知らぬ幼児多くなり 紅

卒寿米寿にめぐりくる春 利

文台の木目に散らせ今日の花 孝

浅葱まだらの蝶々の舞 紅

平成七年五月十七日 首尾

於 江東芭蕉記念館

連衆 高橋豊美 武村利子 緑華亭孝子

岩垂景翠 船本志紅

源心 墨香はし 橘 文子 捌

文台に墨香はしき五月かな 文子

玉巻く芭蕉庵の門口 道子

散歩道ジョギングの群過ぎゆきて 梅香庵久美子

鳩に餌やる幼児弟 政志

思ひきり良夜の海に声をあげ みづゑ

けいこ酣くんち笠鉾 健

そぞろ寒上着やさしく掛けてやり 淑子

好きと並べし枝豆の粒 美

富士山麓怪しき科学実験室 志

鍾乳洞に凍る白骨 美

何となくピカソ・マチスの画に溺れ 志

財産管理ままならぬ爺 美

花の昼銭湯高窓桶の音 淑

仔猫に猫語教はりし夢 健

畑打の人に道訊く仮免車 道

消火器入荷告げる有線 淑

お笑ひがエッセイ書きて荒稼ぎ 同

泡を吹きつつビールがぶ呑み 健

絡まれて絡んで帰る六本木 美

×一同志意気投合す 志

故郷は月明の底雪囲 道

鱈捕る漁師深き足跡 美

太棹の曲洋風に編曲し 道

行ってみたいいな巴里の下町 健

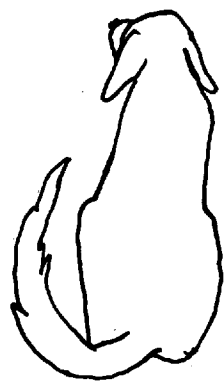
署長さん胸の勲章誇らかに 志
中庸守り持薬胃薬 美
花静か円空仏は笑ひせる 道
春のパラソル回す階 淑

平成七年五月十七日 首尾

於 江東芭蕉記念館

連衆 加藤道子 梅香庵久美子 緒方健

峯田政志 山口みづゑ 金久保淑子



「猫養作品集V」訂正
一一五頁7句目 緬羊 ↓ 羚羊 に
七四頁発句 花 ↓ 苑 に
おわびして訂正致します。

歌仙 武蔵野の 東明雅 捌

武蔵野のはげに小暑のつどひかな
 孝子 明雅
 李も紅く鳥を呼ぶ頃
 孝子 和子
 葛素麵盛れば幼なの喜びて
 健悟 郁子
 教則本は卓に片つけ
 月の出に大漁船の還る浜
 瑞枝 好敏
 流木拾ふやや寒の影
 看よりラジオを友の温め酒
 悟 和
 もてあましるる脚の長さよ
 唐棧を粹に着こなす銀ながし
 孝 敏
 綺麗どころを泣かす義太夫
 敏 郁
 ハイデルベルグ哲学の道
 枝 和
 近月に王の亡霊さまよふか
 和 孝
 鬼やらひする門々の声
 向ふ傷ぶつかり稽古我れ先に
 悟 敏
 そつと後に廻る碧い眼
 席取りの苦勞をかこつ花盛り
 敏 郁
 くすくす笑ふ四囲の山々
 和 枝
 「西行」がベストセラ―の弥生尽
 集中講義はいつもみちのく
 敏 孝
 齢より神経的な若禿で
 たのしんでをり猫の手ざはり
 同 同
 アジトには教祖のピラとごきぶりと
 同 和
 ひそと襦袢を縫うてゐる人
 同 同
 銭かねの話はやばよ老の月
 同 同
 7・7・7の七夕の夜
 同 同
 コスモスの揺れの真中に給油待つ

枝 郁 同 和 同 孝 敏 枝 和 郁 敏 悟 孝 和 枝 郁 敏 孝 和 悟 好敏 瑞枝 郁子 健悟 和子 孝子 明雅

ダブルデートがばれる体臭
 敏 悟
 ふくよかな秘書が会見中止告げ
 敏 悟
 土間いっばいに並ぶ雪沓
 敏 孝
 水垢離の禪も凍て永平寺
 孝 悟
 筆をリュックの底にひそめて
 郁 悟
 三代の画伯が描く夢の跡
 郁 悟
 雨あがりたる後のすがしさ
 悟 雅
 落花霏々久保田の酔のほろほると
 眼張の煮付つつく塗箸
 枝 雅
 平成七年七月七日 於三鷹「緑華亭」
 連衆 坂本孝子 式田和子 東 郁子
 大窪瑞枝 豊田好敏 佛淵健悟

歌仙 卯月の日 東明雅 捌
 森閑と路地に卯月の日射しかな
 水壺
 玉解く芭蕉吹き過ぐる風
 文子
 大瓶に麦湯たっぷり冷しめて
 弘子
 国語算数宿題の子ら
 達子
 良夜待ち抽象画家は筆をとる
 千恵子
 栗鼠が覗けるやや寒の庭
 路子
 紅葉見の帰りは酔のほろほると
 明雅
 あなただけよと配るネクタイ
 弘
 女装癖十年一男二女ありて
 達
 孔雀飼ひたる寺の境内
 恵
 税金の督促状のあまたたび
 壺
 やっぱり苦い胃痛散薬
 文 路
 加賀の宿ぢぶ煮の椀にさせる月
 同 路
 雪積む夜は太郎眠らせ
 同 文
 パソコンにダブルソネット打ち出され
 文 同
 記念切手は欠かさずに買ふ
 恵 同
 浅葱幕はらりと花の吉野山
 達 同
 旅人入れて尽きぬ春興
 壺 同
 どんたくのしゃもじ行列賑やかに
 路 同
 車のかげは猫の溜り場
 弘 同
 ドンキホーテ見上ぐる隙にしてやられ
 文 同
 魔法のランプこするキュッキュツと
 路 同
 粗塩で身体揉んで磨きあげ
 恵 同
 軍曹殿より恐い女房
 路 同
 紅殻の格子の奥の五月闇
 達 同
 新党構想ついに潰れて
 弘 同
 老いばれてまたうろろとさがしもの
 達 同
 あの世のわれがわれを手招く
 壺 同
 輝ける飛鏡に映る影いくつ
 文 同
 優勝力士大たぶさ揺れ
 同 路
 この年の稔りよろこび「ほほほのほ」
 同 路
 ボタンを押せば家事は完了
 弘 同
 馬券までマークシートで買ふ世代
 恵 同
 出払ってゐる山小屋の衆
 達 同
 花ふぶき散らす天狗の羽団扇
 同 路
 膝をそろへてつまむ豆炒
 壺 同

平成七年五月七日 於 江東芭蕉記念館
 連衆 今宮水壺 橘文子 市野沢弘子
 篠原達子 鈴木千恵子 倉本路子

連句とRENKU (1)

浅賀 淑代

連句というのは、英語ではlinked poetry といふのだそうです。国際連句協会の近藤正(蕉肝)氏のお話です。俳誌等には linked verse やlinked poem の表現も目にします。がゆくゆくはこの単語が訳語として定着するのでしょうか。ところで、海外では、Renga はともかくも、Renku に対する認識はまだ低いようです。が、最近、芭蕉翁三百回忌などの行事を機に、連句の「国際化」が実現しつつあるようです。

なかでも特筆すべきは、一九九二年夏、国際連句協会主催の北米連句ツアーが成功を収めたことです。その経緯は、矢崎藍氏(ころも連句会)が苦勞談も交え、紹介されています(「季刊連句・第三九号」)。また、佐渡の天の川連句会(福田眞久氏主宰)は、九三年から、米国内各都市のハイク詩人たちとファックスによる連句交換を続け、いくつかの歌仙を満尾、発表しています。さらに、豊田連句恋々祭(同年)や伊賀上野市・菅原神社(九四年)での国際連句会、成蹊大学国際連句コロキアム(同年十月)と、海外の連句人との交流を考え、推進する動きは、このところ積極的に展開されています。

アメリカ・ハイク協会のウィリアム・J・ヒギンソン氏も、こうした展開の中で尽力されているお一人です。前記の成蹊大学「国際連句コロキアム・国際連句の展望」で、同氏は、特に海外での連句理解に不可欠なものとして、Link(付け)とShift(転じ)の二つの要素を取り上げ、今後の大事な課題として詳しく論じられました。

確かに、米国の作品には、付け・転じの概念がないのではと思われるものがあります。例えば、歌仙「WINTER RAIN」の巻(両吟・K. Tanemura and J. Kilbride / 『フロッグポンド』九四年・冬号)の表六句です。

only the stone-smell
tells of it... (冬の雨/場) kt
winter rain

at the thousand foot level(霧・雪/場) jk
fog reaches a field of snow

starlit night- (星・露・風/場)

jagged shreds of mist
shape the breeze kt

not sure of the source (鳥の声/自) jk
of the nightingale's song

the full moon

submerged in a cloud (満月・雲/場) kt
its light remains

the birch grove crimson (樹木・暁/場) jk
at dawn

ヒギンソン氏の付け・転じを重視する考えは、明雅先生が折々示される「連句が将来いかに変化、変貌しようとも、絶対に失ってなぬものは、作品を作り出すこの文芸独自の運動であり、メカニズムであると思う。」(『新炭俵』)というお考えを踏まえているように見受けられます。

さらに、ヒギンソン氏は、米国での「二十韻」の普及について言及されましたが、早速論文「SHORTER RENKU」(近藤正氏と共著)を米国の俳誌「FROGGPOND」Vol. XVII:4 Winter 1994(『フロッグポンド』九四年冬号)に発表され、二十韻が短い連句形式でありながら、その構造とリズムのなかに、歌仙三十六句に見いだされるようなしっかりとした特質と内容を備えており、しかも、丸一日を費やすことなく一巻が完成できるという特徴を紹介しておられます。また、明雅先生の句数式付去嫌・式目歌・季題配置表(および例材題)が一枚になったカードをきっちり訳されて一覧にされ、アメリカの連句人たちに提供されています。連句が米国にも着実に根を下ろしつつあることに感銘を受けた次第です。

「平成七部集」進行中

桃雅会 杉山壽子

佐藤正秋さんのこと

高橋豊美

少年の面差し遺し辛夷咲く 正江

「今頃、何故古い七部集なのか」と言われる方もございます。「そこに山があるから」と言われるように、「そこに『冬の日』の足跡があるから」と言うより他はありません。

そんなわけで平成六年十一月十六日、昔芭蕉が名古屋連衆、野水、荷兮、杜國らと巻いた日に近い時を選び、当代一の俳諧師東明雅先生、郁子奥様、桃徑庵和子宗匠をお迎えし、三歌仙を首尾、『平成冬の日』成る。本屋良子様、加藤治子様ら多くの客人が参加され、熱田神宮へご奉納する。

平成七年三月八日、桃徑庵和子宗匠古稀祝賀連句をかね『春の日』歌仙一卷、二十韻二巻を首尾。水野あや様、柴田由乃様、高橋良風様、森岡しげる様らと桃雅会会員らとの祝賀にふさわしい和やかな連句会となった。

平成七年八月二三日、連句協会の宮下太郎先生をお迎えし『あら野』を巻く。当日猫養会の佛淵健悟さんもご参加下さるとのこと。私共会員はいろいろなお客様から多くの刺激を受け、和子宗匠の下で満三歳の育ち盛り。

平成八年に獅子門道統國島十雨宗匠をお迎えしたきものと思っている。又再度東明雅先生には「猿蓑」「炭俵」のあたりで、又猫養の方々と蕉風発祥の知で巻きたきものよ。

正秋さん、本名は正昭さん。同期でACCの「連句入門」に入門。明雅先生のご指導を受け、正江先生のご指導で土良の会を結成しました。正江先生の発句は、正秋さん追悼の句です。

そうでした。なによりも目のくりくりとして、対象を正面から見詰める、目の光的印象的な人でした。連句では同期でも、若輩の私がこう言うのも失礼ですが、『永遠の利発な少年』そういう印象でした。

弁護士とお近付きになったのは初めてなので、私も長男として相続問題などについてお話をうかがっていると、結局私が何も考えていないことが明らかになり、「こういう人が結構いるんだよねえ」と、正秋さんはあきれてしまいました。

是非今度銀座の事務所いらっしやい。相談に乗ってあげる。せっかくそう言ってくださったのですが、その儘になってしまいました。

せせらぎによくひかる目の螢かな 豊美

連句と酒 *

「川開き」

中川 哲

私たちが愛用してゐる「季寄せ」によると「川開き」は晩夏の項に入っている。よそは知らず、江戸隅田川の川開きは、旧暦の五月二十八日、曾我兄弟討ち入りの日と決つてゐたらしい。季でいへば仲夏にあたる。

江戸っ子といふのはどうしたわけか曾我兄弟がご最良で、江戸三座の正月はかならず兄弟を主人公にした「曾我狂言」が始まった。評判がいいと、バリエーションを交へながら（助六実は曾我五郎でな具合に）ときには「川開き」の頃まで兄弟が舞台で活躍した。

この日に楽屋では「曾我祭」の祝宴が張られ、吾妻橋や両国橋では川開きの花火に川面も橋も賑わつたらしい。

私も子供のころ町内のをちさんたちに連れられ、柳橋の料亭で、玉子焼を頬張りながら花火を見た覚えがある。酒を飲んだ覚えはない。

▽ 第七回全国連句新庄大会

日時 平成七年九月一日、二日
場所 山形県新庄市 新庄市民プラザ
主催 新庄市教育委員会・新庄北陽社
問合せ 新庄市大手町一―六十 新庄市民
プラザ 連句大会事務局宛
参加締切 八月八日

▽ 猫蓑会正式俳諧・連句興行

日時 平成七年十月十八日 一時～
場所 江東芭蕉記念館

▽ 第十回国民文化祭・とちぎ九五

日時 平成七年十月二十九日、前夜祭
平成七年十月三十日十時～五時
(入選発表、講演、実作)
場所 黒羽町民体育館
問合せ 栃木県宇都宮市本町九―十四
県庁南第二別館内 第十回国民文
化祭 栃木県実行委員会事務局
「文芸祭」連句係

TEL 0286-23-2225・6・7

入江 たか子

杉内 徒司

一月十七日東京芝公園の聖アンデレ教会の
葬儀に花一輪を献じたお返しの手紙に同封さ
れたテレホンカードの表は「明治一代女」
(昭和十年日活)に扮したものだ。

昭和十年のこと、ホトトギスの武蔵野探勝
会は日活多摩川撮影所を訪れ、入江たか子主
演で撮影中の「明治一代女」を見学したが、
高浜虚子はこの時、文化学院時代の教え子入
江たか子に「麗人と云はれて月もまた欠けず」
の句を贈ったという。

(川崎展宏・清崎敏郎共編『虚子物語』)
昭和五五年八月「俳諧鶴屋南北忌」の付廻
歌仙の折、私は虚子のこの句を思い出し、月
の句を頼んだが、その後を馬山人が嬉しそう
に付けてくれたのが左の一連である。

麗人とたたへられしは昔なり 入江たか子
夕顔棚は行水の月 高藤馬山人

昭和四一年六月から始まった三井連句会の
帰りに「とん亭」に寄ったのが縁で毎月一回
浅酌することになった。有楽町の東宝ツイン
タワービルの九階にあるこの店で猫蓑衆は歌
仙を六巻巻いている。捌きは明雅四回、一期
生北城青泉一回、暉峻康隆一回。第一回の折
お店の暇を見て顔を出されたたか子さんに月

の句を詠んでもらうことになった。

第一回の実花さんの五句の折(昭和五五年
十一月二十九日)

盛塩も冬めくものとなりにけり 下田実花
「月よりの使者」を撮りしは月の頃 たか子
立句が同じ実花さんの句の時(昭和五六年
一月十七日)は左記の通り。

のびやかに衣紋つくりて春着の妓 下田実花

バラライカ爪弾く影に夜長く 中島啓世

月のささやきたぎるサモワル たか子

捌きの明雅氏はこの付句について次のよう
に書かれている。

「月の摩天楼たぎるサモワル」がもとの
形だった。作者は会場「とん亭」の女主人
で元日活の女優入江たか子さんである。彼
女主演の映画の題名に因んで「摩天楼」
(昭和四年)を出したが、一句あとに「羅
生門」が出て、この句がすばらしいので、
入江さんにはお気の毒だが、連句一卷では
佳句は絶対に強いので仕方がない。
今回は勘弁していただくことにした。

(杏花村通巻五一号)

昭和五六年九月二六日青泉捌きの折

懐手しておたま灰皿 秋本正江

まぼろしのツインタワーに牙ゆる月 たか子

暉峻先生捌歌仙は昭和五十七年五月二二日
で、それが「とん亭連句」の最後になったが、
いい思い出ばかりが浮かんでくる。

【Q】校合というのはどのような観点で行われるのでしょうか。又、お捌きによって作者名が変えられたりということもありますが、これはどのように考えたら宜しいのでしょうか。

【A】校合というのは、一巻満尾した上で、捌き手が自ら添削することを言います。どのように細心に捌いても、出来上って一巻全体を点検すると、思わぬところに差合や表現の重複を発見するもので、さらにそれだけでなく、一句一句も、それぞれ推敲することによって、より完成された作品にすることができません。

それはちょうど、大工が柱を削った時、さらに磨きをかけて、小さい疵を消すようなもので、よく校合のできたものを「鉋目が取れた」などと申します。

一巻の中の作者名を変えるということは、たとえば、普通の合同歌集、あるいは合同句集などでは考えられないことでしょう。和歌や俳句はその一首あるいは一句はそれぞれ個人のもので、その大切な作品を他人のものにするなど飛んでもないことでしょう。ただ俳諧(連句)は和歌や俳句と違い、一巻の作者は捌き手で、一巻の中の個々の句の作者は、捌き手に協力して、一巻の材料を提供し

ているのです。だから、一句一句の独自性を主張するよりは、一巻の完成に協力する方が大切で、一巻の完成の為ならば、捌きがいかにきびしい添削をしても、あるいは作者名を都合によって変えようとも、連衆は甘受すべきであります。

このように作者の個性を軽く見るやり方は自我意識の強い近代人には素直に受け取られないでしょう。しかし、個より一座という衆の文芸である俳諧(連句)においては止むを得ない特質であると観念するより外はありません。

この作者の名前を変えるということは、校合の時ばかりでなく、一座興行中でも、捌き人あるいは、連衆の申し出により、行われることがあります。能役者でも歌舞伎役者にしても、普段は近代人でしょうが、一旦、舞台に上れば、近代意識は別にして演技するわけでしょう。だから、俳諧(連句)を作る人も、その時だけは俳諧(連句)のルールに従って下さい。

以上は捌き人が自分の作品を添削する時の考え方です。他人が捌いたものを頼まれて批評評価するのは、点者で、加筆・加朱と言いました。これは細かい添削はしないのが普通です。ましてや、作品中の作者を変えるなど、それこそ飛んでもない話です。このような甘い点者の存在が俳諧を墮落させたことは、ご存じの通りであります。

◇ 猫養発展基金ご協力有難うございます。

五千円 前田圭衛子

一万円 篠原達子

(敬称略)

◇ 基金の口座 富士銀行新宿西口支店

普通3376045 猫養基金

.....S.....S.....

あとがき

○前から無意味に忙しがるヘキがあったが、この所それが昂じてきた。内容の空疎をカムフラージュする擬態と知っていても、中々なおらない。当方の暑くるしくらしを尻目の、飼猫の涼しげな無為がうらやましい。

○大リーグのノモの活躍は久しぶりに爽やかな話題である。どこまで彼はやってくれるのだろう。そう言えばこの人も涼しい顔をしている。

○暑中、ご執筆の方々には感謝申し上げます。

季刊「ねこみの通信」第二十号

発行者 猫養連句会

編集人 調布市染地三・一 多摩川住

宅ホ三・一〇一 佛洩健悟

印刷所 アトリエ・Neko